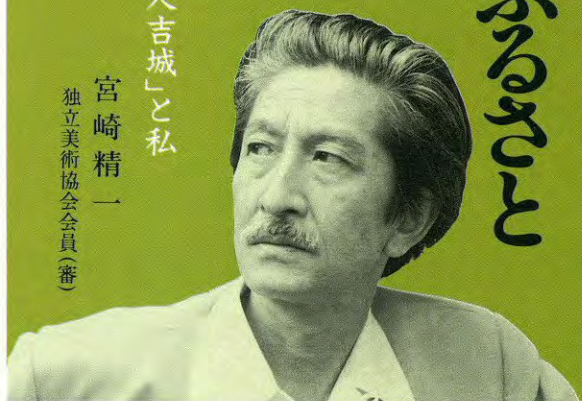




私を、絵画を、 育んでくれた 永遠の ふるさと



「人吉城」と私
宮崎 精一
独立美術協会会員(審)

人吉城も今と昔では、ずいぶん趣
が変りました。橋がかかって大変便
利にはなりましたが、何か「お
城」という歴史的な臭いが少なくな
りました。

小学生の頃、よく画の先生に連れ

られて、お城まで出かけました。絵
を描くというより野に親しむような
日々でした。

一面に背丈の伸びない雑草が繁っ
ていて、人工的には作る事ができ
ない、自然が作ったじゆうたんとい
った素朴なものが伝わってきたこと
を思い出します。体が土とともに、草
とともにあったという感じがします。

昔の写生は、「城」を描くにも全体
をパノラマ式に美しく描いたものを
「上手」としていました。

私と二、三の荒っぽい画かきは、
非常に抽象的なものですから、お城
を描くのに、石垣を二つだけ描いた
り、「木を描け」といわれば、根っ
子だけを描いたり、そういうものが
私の画の中に今も残っています。

人吉城は、私にとっては絵画以前
の問題で、球磨川とともに、空気の
ような存在です。

シルエットになった朝の人吉城も
いいですが、私は夕陽が沈んで静か
な夜のほとりの始まる中、昼間見え
ていた汚いものが一切消えて、そこ
に存在する有機的なものが私に訴え
てくる。そういうものを感じさせて
くれる時が好きです。

その中を支えているものは、一本
いっばんは見えないものの、沢山な
木であり、石垣であり、そういう内
容を含んだ面、それが絵画じゃない
かと思えます。



【人吉城】
別名「織月城」とも呼ばれる人吉城は、
平安時代末期、平頼盛の代官大瀬主馬助の
山城でしたが、建久九年(一一九八)相良
長頼がこれを滅ぼし、以来七〇〇年、相良
氏の居城として栄えました。
第十八代相良義陽は、安土城を手本に、
一度人吉城の改築を試みましたが、朝鮮出
兵のための財力難や江戸幕府の大名統制強
化等て果たせず、近世城の特徴である天守
閣の建築は実現しませんでした。
本丸(高御城)、二の丸(御本城)、三の
丸、総曲輪から成るこの城は、北に球磨川
西に胸川、南と東には断崖が控え、天然の
要塞を誇っていました。
昭和三十六年に、国の指定史跡となりま
した。

心のふるさと 民話とわたし

とっくりのなぞ

代陽小 五年 木村 菜美

私が一番おもしろくて、一番わらっ
たのは、彦一どんが、とっくりのなぞを
解いた所です。それは、彦一どんが、
一人二役で、とっくりと、珍念の
大飯食いをやるように話していたから
です。それに、珍念どんも、素直に、彦一どん
とおしよさんのとんちに、まんまと
ひっかかりました。こんなことを
考えながら読み出すと、また、
わらいだしそうになります。

彦一どんから、とんちをどかれ
たおしよさんは、残念かもしれないが、
大飯食らいをやる事ができた珍念
は、とくをしたと思います。

おしよさんのとんちは、
思いやりのあるものだ、考えました。
私が九月から住んでいる八代の家の
近くに光徳寺があり、彦一どんのお墓が
あると知って、彦一とんち話の興味が
深まりました。

●感想文
八代市立代陽小学校
5年 木村 菜美さん



●感想画
6年 柏田 貴史君



「とっくりのなぞ」 あらまし

八代の光徳寺の珍念は、頭が悪いえ
に大飯食らい。いつも失敗ばかりしては、
おしよさんにしかられていました。
ある日、おしよさんは珍念を呼んで、
「珍念、十三里は、こうてい。」
と、使いにしました。珍念は十三里が
何かわかりませんので、彦一どんに尋ね
ました。

「そらあ、やさしいことすたい。栗
(九里)より(四里)うまい十三里で言いま
しゅうが。むかしから十三里はからいも
のことときまつりまもん。」
あくる日、珍念がまた彦一のところへ
やってきました。

「彦一どん、助けてください。この一升
どつくり酒は二升こうてい、おし
よさんが言いはったもん。」
そこで、彦一はとっくりに耳をつけて
聞いてみました。

「とっくりどん、あなたの腹に酒が二升
はいるかいな。なんだ、一升しかはいら
んて? なに、小僧さんの腹がうらやま
しい。どうして? なに、なに、小僧さ
んの腹がいっぱい広がって、子どものく
せにおとなより飯ば食うというのか。は
はあん、小僧さんは腹いっぱいどころか
腹二はいも食うのだな。だから頭がぼん
やりしてるって?」

珍念は顔をまっかにして、
「彦一どん、ようわかりました。おしよ
うさんは、わたしの大飯食いを心配して
教えてくれたったいな。」
それから、珍念は大飯食いをやめて、
りつばなおしよさんになったそうです。